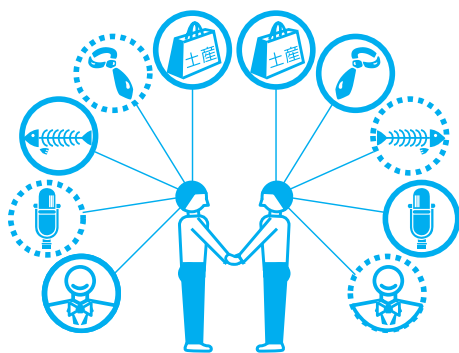


「人」がつなぐもの

いえしまの魅力的なもてなしは「人の生活」とつながっている。ある人が知合いや友人を連れてくると、その分だけ「もてなしのバリエーション」も増えることになる。つまり、「人」が「もてなしの要素」をつないでいることになる。だから、いえしまでは「人がたくさんつながっていること」が大切だと思う。そして、いえしまを訪れる人たちとのコミュニケーションを積極的に図って、「いえしまのこと」や「自分の生活のこと」をたくさん紹介してほしい。こういったことが、いえしまの「新しい観光のあり方」を形作っていくことになるのだと思う。島の人々が自らの生活レベルで訪れる人をもてなすという視点に立てば、いえしまは島の外の人々が継続的に訪れ、豊かな交流が生まれる島になる可能性を秘めていると思う。



つながる「もてなしのネタ」



豊かなもてなしの島に

「探られる島」プロジェクト2007は、平成19年の秋に家島本島・坊勢島での2泊3日のフィールドワークと大阪での4日間の会議を合わせた計7日間のワークショップの企画である。全国から多様な専門分野を持つ学生や社会人が集まり、「いえしまの生活の深層」をテーマに探った。今回は一般のご家庭に「民泊」させてもらい、いえしまの「もてなし」についても考える機会となった。これらのプログラムを通じて、専門家のアドバイスを受けながら、メンバー全員で一つのコンセプトに沿って冊子にまとめた。それがこの「探られる島」プロジェクトブック03だ。プロジェクトの中では「今後のいえしま」についてもみんなで話し合った。いえしまでは今後「観光」についても考えていくようだ。「観光」においては「もてなし」のあり方は重要な視点となる。今回僕らがいえしまを訪れて感じたことは、いえしまで生活する人たちが、自らの「日常生活の延長線上」でもてなしてくれたことに新鮮な驚きや楽しさがあったことである。だからいえしまは、むやみに「観光のための新しいモノ」をつくる必要はない、と僕は考えている。今回僕らが感じた「魅力的なもてなしのあり方」をこれからも大切にしていってほしいと思う。僕らが今回の2泊3日のフィールドワークの結果から議論・考察した内容はいえしまの一側面を捉えているに過ぎないのかもしれない。いえしまにはまだまだ隠された魅力があるはずだ。だからこれからも僕は新しい仲間を連れて、たびたびいえしまを探りに訪れたいと思う。



プロジェクトの仲間たちといえしまを探りに向かった



坊勢島にも上陸し産業の風景を探った



夜を徹して「家島の魅力」について話し合った